金沢大学考古学研究室　2008 年 6 月 30 日

金大考古　第 61 号

澎湖所見的肥前瓷器

盧　泰康（国立台南芸術大学）

１．澎湖馬公所見肥前青花

澎湖群島地處台灣海峽東南方，東臨福建，西面台灣，自古即為東亞沿海航線之要衝。馬公港位於澎湖內海，澎湖本島西側的馬公灣內。2005 年 4 月中旬，馬公港進行水下淤泥浚深工程，港道清理浚深後所撈起的海底堆積物中，發現大量宋元至近代陶瓷遺物，其中屬十七世紀後半者，可見數件肥前青花瓷，以下分述：

克拉克風格青花盤，標本編號 MGG0150，復原後圈足徑 7 公分，器形特徵為透明釉色灰青，器壁斜弧，圈足淺細，盤心畫花草紋，盤內器壁畫開光紋。年代約為 1650 至 1670 年代，應為日本九州有田地區外尾山窯場或嬉野吉田窯產品，類似青花盤可見於印尼 Pasar Ikan 遺址[1]、菲律賓馬尼拉 Intramuros 城[2]。

荒磯雲龍紋青花碗，標本編號 MGG0505，復原後圈徑 5.6 公分。器形特徵為弧壁，圈足細直。青花發色灰藍。外壁可見簡筆雲龍紋尾部。碗心完整，可見簡筆荒磯紋（波濤紋）。年代約為 1660-1680 年代，應為波佐見窯或有田其它地區所燒製。類似青花碗曾發現於台灣臺南社內遺址[3]；同類海外出土遺物見於越南中部會安（Hoi An）遺址[4]、泰國大城府（Ayutthaya）Chao Phraya 河打撈遺物[5]等。

青花花草紋碗 / 杯，標本編號 MGG151、MGG502，特徵為直口、弧壁，外壁或器心可見花草紋，為 1650-1670 年代有田地區所燒製。

２．明鄭時期的澎湖及其陶瓷轉口貿易

1662 年鄭成功驅逐台灣的荷蘭人，並以之做為對抗清朝的主要基地。十七世紀中期以後，由於清朝政府在中國沿海實施海禁與遷界政策，意圖斷絕鄭氏經濟來源，對沿海貿易造極大影響。儘管如此，台灣鄭氏仍積極從事海外貿易：

別遣商船前往各港，多價購船料，載到臺灣，興造洋船，鳥船，裝白糖、鹿皮等物，上通日本；製造銅熕、倭刀、盔甲，並鑄永曆錢，下販暹羅、交趾、東京各處以富國，從此臺灣日盛，田疇市肆不讓內地[6]。

明鄭對外貿易的各類貨物中，陶瓷亦為重要貿易項目，透過對臺灣出土外來陶瓷及相關史料研究可知，台灣明鄭在此一時期，不僅從事中國沿海陶瓷走私貿易，同時也經營非中國陶瓷（以日本肥前瓷器為主）的轉口貿易[7]。澎湖位於臺灣海峽東南，海上航運交通與軍事上的重要性不可言喻。早在永曆十八年（1664）三月，鄭成功之子鄭經，全面放棄沿海各島，退守台灣，途經澎湖時，

1　大橋康二，《「海を渡った肥前のやきもの」展》，佐賀縣：佐賀縣立九州陶磁文化館，1990 年，頁 97。

2　野上建紀，〈ガレオン貿易と肥前磁器－マニラ週邊海域に展開した唐船の活動とともに〉，《上智アジア學》，第 23 號，2005 年，頁 244、fig. 12'、fig. 14。

3　野上建紀、李匡悌、盧泰康、洪曉純，〈台南出土の肥前磁器－ 17 世紀における海上交易に関する考察－〉，《金大考古》，No. 48，2005 年，頁 6-10。

4　菊池誠一編，《ベトナム日本町ホイアンの考古學調査》，昭和女子大學国際文化研究紀要，Vol. 4，1997 年，頁 43、圖 23。

5　大橋康二，〈東南アジアに輸出された肥前陶磁〉，《「海を渡った肥前のやきもの」展》，頁 158-160、圖 362-371。

6　（清）江日昇，《臺灣外記》，臺北：臺灣大通書局，1984 年，頁 237。

7　盧泰康，《十七世紀臺灣外來陶瓷研究－透過陶瓷探索明未清初的臺灣》，台南：國立成功大學歷史學研究所博士論文（未出版），2006 年，頁 212-246。

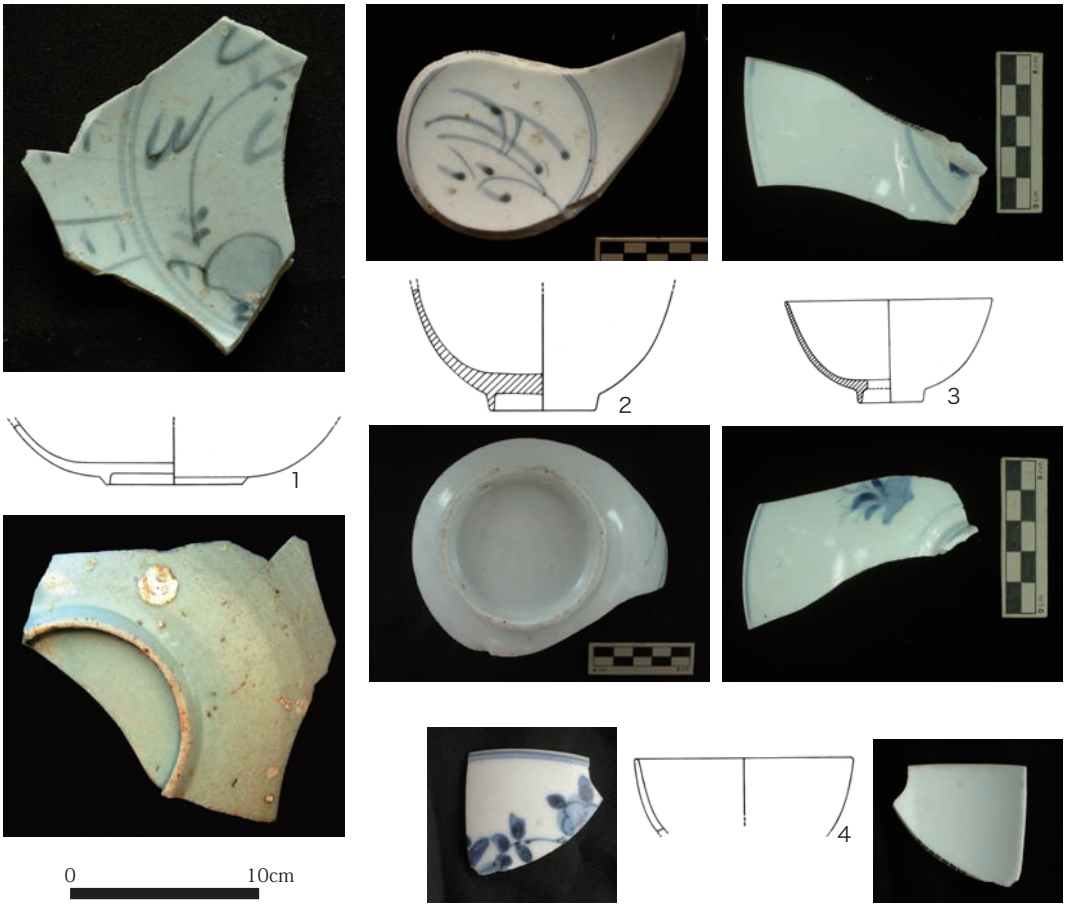

図　澎湖群島馬公港発見の肥前磁器

便與將領忠振伯洪旭踏勘澎湖諸島：

> （洪）旭曰：澎湖乃臺灣門戸，上至浙江、遼東、日本，下通廣東、交趾、暹羅必由之路，當設重鎮，不可苟且。倘被占踞，則臺灣難以措手足。鄭經是之，就媽祖宮（今馬公）設立營壘，左右峙中置煙墩、砲臺……[8]。

此外，明鄭時期所繪〈永曆十八年臺灣軍備圖〉中，於澎湖馬公灣內註記：「天妃宮前好拋船」一語[9]。也反映出澎湖馬公灣，對於當時明鄭船隻海上航運中的重要性。

明鄭時期史料所載澎湖狀況，大多為軍事防務與海戰記錄，有關貿易狀況幾乎未見，而馬公港出水陶瓷遺物中，屬於明鄭時期或十七世紀後半陶瓷數量頗大，實反映出澎湖馬公港附近海域，在當時海上商貿往來的具體狀況。就遺物類型而言，除了日本肥前青花瓷外，馬公港出水十七世紀後半陶瓷中還包含不少福建產品，甚至是江西景德鎮窯貿易瓷。這些遺物少見於澎湖陸上遺跡，卻與臺灣本島出土者相同，同時亦可見於海外地區，顯示出澎湖馬公港在明鄭政權海上貿易網絡中，扮演了一定程度的角色。

以澎湖馬公港所見肥前青花瓷為例，年代皆屬1650-1680年代之物，其中荒磯雲龍紋青花碗，可在台灣台南新市社內遺址發現類似遺物。其它台灣南部發現肥前瓷器之遺址，尚包括了台南安平熱蘭遮城遺址、台南市區明鄭墓葬，以及高雄鳳山舊城遺址。不僅如此，與澎湖馬公港所見相同之肥前青花瓷，亦可見於印尼、菲律賓、越南、暹邏等東南亞地區。

由此可知，澎湖馬公港海域亦為明鄭肥前陶瓷貿易航運所經之地。由於澎湖位於台灣海峽航運要衝，每年依靠季風來往於台灣、日本、東南亞等地的明鄭貿易船，可能出於天候狀況、貨品轉載、船隻補給等原因，暫泊於澎湖馬公灣，然後再度發航前往目的地。是故，澎湖亦為明鄭海上貿易網絡中的重要環節。

(tk.lu @ msa.hinet.net)

8 （清）江日昇，《臺灣外記》，臺北：臺灣大通書局，1984年，頁231。

9 陳漢光、賴永祥，《北臺古輿圖集》，臺北:臺北市文獻會，1957年，頁5。

澎湖群島発見の肥前磁器

盧　泰康（訳　野上建紀）

１．澎湖群島馬公港発見の肥前磁器

澎湖群島は台湾海峡の東南方に位置する。中国福建地方の東、台湾の西方にあたり、古くから東アジア沿海航路の要衝であった。そして、馬公港は澎湖内海、澎湖本島の西側の馬公湾内に位置する。2005 年 4 月中旬、馬公港の水底の浚渫作業が行われ、さらった海底の堆積物の中に宋元時代から近代に至るまでの大量の陶磁器が発見された。その中に 17 世紀後半に属する肥前の染付磁器が含まれていた。以下、それらについて個別に述べる。

染付芙蓉手皿，標本番号 MGG0150、復元後の高台径 7cm、表面は灰色がかった青みをおびた透明釉がかかっている。高台は浅くて薄い。見込みには草花文が入り、内側面には放射状に区画した文様が入れられている。生産年代は 1650 ー 1670 年代である。有田の外尾山窯や嬉野の吉田窯など外山の窯場に類例が見られる。海外の消費地遺跡ではインドネシアのパサールイカン遺跡 (1)、フィリピンのマニラ・イントラムロス遺跡の出土遺物 (2) などに類例が見られる。

染付雲龍見込み荒磯文碗，標本番号 MGG0505、復元高台径 5.6cm。器形は丸碗であり、高台は細く、真っ直ぐ立ち上がっている。染付の発色は灰色がかった藍色であり、外面には雲龍文の脚部が見られる。見込みが完全に残っており、いわゆる荒磯文（波濤文）が入れられている。生産年代は 1660 ー 1680 年代頃である。波佐見や有田周辺の窯場で生産されたもので、台湾の台南社内遺跡の出土品に類似する (3)。その他、ベトナム中部のホイアン遺跡 (4) やタイのアユタヤ付近のチャオプラヤ川から採集された遺物 (5) に類例が見られる。

染付草花文碗・坏，標本番号 MGG151、MGG502、器形は丸碗である。口部は直行する。外面や見込みなどに草花文が入る。1650 ー 1670 年代に有田などで生産されたものである。

２．明末鄭氏時代の澎湖群島と陶磁器中継貿易

1662 年、鄭成功は台湾のオランダ人を駆逐し、ここを清朝に抵抗する主要な拠点とした。17 世紀中頃以後、清朝政府が鄭氏の資金源を絶つことを目的に中国沿海における海禁と遷界政策を実施したことにより、沿海の海上貿易は極めて大きな影響を受けたが、それでも台湾の鄭氏が積極的に海外貿易に従事したことが記録にも見られる。:

> 別遣商船前往各港，多價購船料，載到臺灣，興造洋船，鳥船，裝白糖、鹿皮等物，上通日本；製造銅熕、倭刀、盔甲，並鑄永曆錢，下販暹羅、交趾、東京各處以富國，從此臺灣日盛，田疇市肆不讓内地 (6)。

鄭氏の対外貿易の各種商品の内、陶磁器も重要な貿易品であった。台湾から出土する貿易陶磁や関連史料によって、台湾の鄭氏は一時期、中国沿海で陶磁器の密貿易を行うだけでなく、中国陶磁器以外の陶磁器（主に肥前磁器）の中継貿易も行っていた (7)。台湾海峡の東南に位置する澎湖諸島の海上船舶交通や軍事上の重要性は説明するまでもあるまい。永暦十八年（1664）三月、鄭成功の子鄭経が、中国沿海の各島を全面放棄し、台湾に退避する途上、将校の忠振伯や洪旭に澎湖諸島の実地踏査をさせている。以下は洪旭の報告である。:

> （洪）旭曰：澎湖乃臺灣門戸，上至浙江、遼東、日本，下通廣東、交趾、暹羅必由之路，當設重鎮，不可苟且。倘被占踞，則臺灣難以措手足。鄭經是之，就媽祖宮（現在の馬公）設立營壘，左右峙中置煙墩、砲臺……。(8)

この他、明末鄭氏時代の絵図〈永暦十八年臺灣軍備圖〉の中には、澎湖の馬公湾内に「天妃宮前好抛船」の一語 (9) が付されている。当時の鄭氏の船舶の海上航運にとっての馬公湾の重要性を示している。

明末鄭氏時代の史料に見られる澎湖群島の状況に関する記録の大多数は軍事防衛や海戦に関するものであ

り、貿易状況に関するものはほとんどみない。馬公港の海底から引き揚げられた陶磁器の内、明末鄭氏時代あるいは17世紀後半に属する陶磁器の量は非常に多く、当時の馬公港付近海域における海上貿易の具体的な状況を反映している。肥前磁器以外に馬公港から引き揚げられた17世紀後半の陶磁器を見ると、福建地方で生産された製品が少なくなく、江西省景徳鎮の貿易陶磁も含まれている。これらの製品は澎湖諸島の陸上の遺跡では台湾本島と同様に少なく、このことは馬公港が鄭氏の海上貿易ネットワークの中で経由地としての一定の役割を担っていたことを示している。

馬公港で発見された肥前磁器はいずれも1650ー1680年代に属するものであり、染付見込み荒磯文碗などは台湾の台南新市社内遺跡で発見された遺物に類似している。その他、台湾南部で肥前磁器が発見されている遺跡は台南安平のゼーランディア城跡、台南市区明鄭墓葬、高雄鳳山舊城遺跡などがあり、馬公港発見の肥前磁器と類似した製品はインドネシア、フィリピン、ベトナム、タイなど東南アジア地域で見られる。

これらのことから澎湖諸島の馬公港海域は鄭氏の肥前陶磁貿易の経由地であったことがわかる。澎湖諸島は台湾海峡の海上交通の要衝に位置しており、毎年の季節風を利用した日本や東南アジアに向かう鄭氏の貿易船は、天候状況、積荷の転載、船への補給等の理由により馬公港に暫く停泊し、再び目的地に向けて出港することができた。そのため、澎湖諸島は鄭氏の海上貿易ネットワークの重要な結節点であったのである。

※図版は原文「澎湖所見的肥前瓷器」と共通である。

註

（1）大橋康二 1990『海を渡った肥前のやきもの展』佐賀県立九州陶磁文化館：p. 97

（2）野上建紀 2005「ガレオン貿易と肥前磁器ーマニラ周辺海域に展開した唐船の活動とともに」,『上智アジア学』第23号:p. 244、fig. 12、fig. 14。

（3）野上建紀、李匡悌、盧泰康、洪曉純 2005「台南出土の肥前磁器－17世紀における海上交易に関する考察－」『金大考古』No. 48：pp. 6-10

（4）菊池誠一編 1997『ベトナム日本町ホイアンの考古学調査』昭和女子大学国際文化研究紀要 Vol. 4：p. 43、図23。

（5）大橋康二 1990「東南アジアに輸出された肥前陶磁」『海を渡った肥前のやきもの展』佐賀県立九州陶磁文化館：pp. 158-160、図362-371

（6）（清）江日昇 1984『臺灣外記』台北：臺灣大通書局：p. 237

（7）盧泰康 2006『十七世紀臺灣外來陶瓷研究－透過陶瓷探索明末清初的臺灣』台南：國立成功大學歷史學研究所博士論文（未出版）：pp. 212-246

（8）（清）江日昇 1984『臺灣外記』台北：臺灣大通書局：p. 231

（9）陳漢光、賴永祥 1957『北臺古輿圖集』台北:臺北市文獻會:p. 5